

各関係機関・団体長 様

愛媛県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

このことについて、8月の予察情報を送付します。

病害虫発生予報（8月）

令和元年 7 月 31 日
愛 媛 県

1 気象予報（高松地方气象台）

1 か月予報 7 月 25 日発表（7 月 27 日～8 月 26 日）

〈 1 か月の平均気温・降水量・日照時間 〉

	平均気温（1 か月）	降水量（1 か月）	日照時間（1 か月）
四国地方	低 20 並 40 高 40 平年並か高い見込み	少 40 並 40 多 20 平年並か少ない見込み	少 20 並 30 多 50 多い見込み

〈 予報のポイント 〉

太平洋高気圧に覆われやすく、向こう 1 か月の気温は平年並か高い見込みです。また、向こう 1 か月の日照時間は多く、降水量は平年並か少ない見込みです。

2 病害虫の発生予想

水 稲

(1) いもち病（早期栽培：穂いもち、普通期栽培：葉いもち）

ア 予報の内容 発生量：（早期）並～やや多 （普通期）並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 7 月中旬の調査では、早期栽培で葉いもちが並の発生であり、南予の一部で穂いもちの発生が認められている。また、普通期栽培において葉いもちの発生はやや多～多である。

(イ) 7 月 1～24 日までの BLASTAM による葉いもち感染好適条件出現の判定では、感染好適日が半数の地点で 4 日以上となっており昨年に比べ多い（病害虫防除所ホームページ掲載データを参照）。

(ウ) 気象予報では、気温は平年並か高い、降水量は平年並か少ないとされていることから、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 窒素質肥料（中間追肥、穂肥）の過用は避ける。

(イ) 圃場観察を行い、葉いもちが発生し病勢が進展している場合には早急に薬剤散布を行う。

(ウ) 今後、出穂期となる水稲では、穂いもち対策として出穂期の基幹防除は必ず行う。特に、葉いもちが認められる圃場では注意する。

(2) 紋枯病

ア 予報の内容 発生量：やや多～多

イ 予報の根拠

(ア) 7 月中旬の調査では、早期栽培で多、普通期栽培も 1 圃場のみの発生であるが多である。

(イ) 普通期栽培の茎数は平年並～やや少ない。

(ウ) 昨年、早期、普通期栽培ともに登熟期に多発した圃場が認められ、圃場での菌密度は高いと考えられる。

(エ) 気象予報では、気温は平年並か高い、降水量は平年並か少ないとされていることから、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 普通期栽培では、発病状況により応急防除を実施する（穂ばらみ期の要防除密度となる発病株率 15～20%を目安）。特に、早期栽培では止葉から下位 3 葉の葉鞘に病斑を生じると収量に影響するので、登熟後期の病勢進展が予想される場合には追加防除が必要である。

(イ) 防除に当たっては、株元まで薬剤が到達するように丁寧に行う。

(3) 稲こうじ病

ア 予報の内容 発生量：やや少～少

イ 予報の根拠

(ア) 昨年、普通期栽培では少発生であったことから、感染源（菌核）は少ないと考えられる。

- (イ) 気象予報では、気温は平年並か高い、降水量は平年並か少ないとされていることから、発生にやや抑制的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 中山間地や平野部の常発地では、幼穂形成期（8月上旬～中旬）頃の低温多雨条件により発病が助長されるので注意する。
- (イ) 普通期栽培での発病が多く、出穂 20～10 日前の幼穂形成期が天候不順の場合には銅剤（粉剤、液剤）等による防除を行う。
- (ウ) 出荷玄米へ本病の被害粒（菌核）が混入すると検査等級が規格外となるので注意する。
- (4) ツマグロヨコバイ
- ア 予報の内容 発生量：やや少
- イ 予報の根拠
- (ア) 7月中旬の調査（払い落とし調査）では、早期栽培でやや少、普通期栽培で少である。また、予察灯の誘殺数も多く、地点で少ない（病害虫防除所ホームページ掲載データを参照）。
- (イ) 気象予報では、気温は平年並か高い、降水量は平年並か少ないとされていることから、発生にやや助長的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 早期・短期栽培と普通期栽培が混在している地域やイネ科雑草が優占する休耕田の近接圃場では、収穫や除草により周辺圃場の密度が急増する事例が見られるので注意する。
- (イ) 本虫に登録のある箱施用剤を処理している普通期栽培では応急防除の必要は無いが、箱施用剤にプリンス剤を使用している地域や箱施用剤を処理していない圃場では、発生（要防除密度：出穂期の成虫密度 30 頭/株）に応じて応急防除を実施する。
- (5) セジロウンカ
- ア 予報の内容 発生量：やや少～並
- イ 予報の根拠
- (ア) 予察灯での誘殺状況は非常に少なく、6月下旬から7月上旬の飛来以降は見られていない（病害虫防除所ホームページ掲載データを参照）。
- (イ) 7月中旬の調査（払い落とし調査）では、早期栽培でやや少、普通期栽培で少である。
- (ウ) 気象予報では、気温は平年並か高い、降水量は平年並か少ないとされていることから、発生にやや助長的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 普通期栽培で箱施用剤を処理していない圃場では発生に注意する。
- (6) トビイロウンカ
- ア 予報の内容 発生量：やや少～並
- イ 予報の根拠
- (ア) 7月23日現在、県下の予察灯では飛来を確認していない。なお、圃場での払い落とし調査においても発生は確認していない。
- (イ) セジロウンカの誘殺状況から、6月下旬から7月上旬にわずかな飛来があったと推察している。
- (ウ) 気象予報では、気温は平年並か高い、降水量は平年並か少ないとされていることから、発生にやや助長的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 飛来量が少なくても同一場所で世代を繰り返し、急速に密度を高めて秋に坪枯れ被害を引き起こす。特に、気温が高い場合は生育が早まり、世代数が増加し、秋季に高密度（坪枯れ）となることがあるので、経時的な密度を把握することが重要である。
- (イ) 主たる飛来日を基にした発育ステージ予測では、防除適期となる第2世代幼虫・成虫の発生予想は8月第3半旬～9月第1半旬と予想されるため、普通期栽培での出穂期防除と仕上げ防除時期と重なるため基幹防除は必ず行う。
- (ウ) 要防除密度は、7月末～8月初めの短翅型雌成虫数が 100 株当たり 20～30 頭、8月下旬～9月上旬の成虫数が 10 株当たり 30 頭で9月中旬以降に坪枯れを生じる恐れがある。
- (7) イチモンジセセリ（イネツトムシ：第2世代）
- ア 予報の内容 発生量：やや多
- イ 予報の根拠
- (ア) 7月中旬の調査（普通期栽培・第1世代）では、ツト数は並である。
- (イ) 気象予報では、気温は平年並か高い、降水量は平年並か少ないとされていることから、発生にやや助長的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 本虫に効果のある箱施用剤の未実施圃場や葉色の濃い圃場で被害が多くなるため、肥培管理に

注意する。

(イ) 圃場観察を行い、発生が多い場合には若齢幼虫期（ツトの発生初期：8月上旬）に防除する。

(8) フタオビコヤガ（イネアオムシ）

ア 予報の内容 発生量：少～やや少

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の調査（普通期栽培）では、発生は確認していない。予察灯における成虫の誘殺数も少なく推移している（防除所ホームページ掲載データを参照）。

(イ) 気象予報では、気温は平年並か高い、降水量は平年並か少ないとされていることから、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 幼虫の発生ピークは7月下旬～8月上旬であり、密度が急増する場合があるので注意する。

(イ) 葉色の濃い圃場で被害が多くなるので注意する。

(9) コブノメイガ

ア 予報の内容 発生量：（普通期） やや多

イ 予報の根拠

(ア) 県下の予察灯では、飛来は確認していない。セジロウンカと同時期に飛来していると考えられるが、飛来量は少ないと考えられる。

(イ) 7月中旬の被害葉調査では、早期栽培での発生は少であるが、普通期栽培ではやや多である。

(ウ) 気象予報では、気温は平年並か高い、降水量は平年並か少ないとされていることから、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 葉色の濃い圃場で被害が増加するため発生に注意する。

(イ) 主たる飛来日を6月29日とする発育ステージ予測では、第1世代成虫の発生時期は8月第1半月頃からと予想される。

(ウ) 防除適期は、粒剤では成虫発生最盛期であり、粉剤・液剤では成虫発生最盛期の7～10日後（若齢幼虫期）となる。

(10) 斑点米カメムシ類（早期・普通期栽培）

ア 予報の内容 発生量：やや多～多

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の調査における発生圃場率は、早期栽培で並、普通期栽培では多である。

(イ) 畦畔掬い取り調査における発生地点率及び掬い取り虫数ともにやや多～多である。

(ウ) 気象予報では、気温は平年並か高い、降水量は平年並か少ないとされていることから、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場周辺の除草を徹底する。出穂直前の除草はカメムシ類を圃場内に追い込む可能性があるため、出穂15日前までに行う。なお、イネ科雑草は草刈りの約3週間後に再出穂が始まるため、水稻の出穂20日前と出穂時の2回実施すると効果的である。

(イ) 防除は、乳熟期～糊熟期（出穂後10～15日）に地域の防除指針に基づき実施する。また、多発圃場では、さらに7～10日後に2回目の防除を行う。なお、ミナミアオカメムシに対してはMR、ジョーカーの効果が劣るので発生種に適した薬剤選択に注意する。

(ウ) 要防除水準は、乳熟期の捕虫網による20回掬い取り個体数で1頭である。

かんきつ

(1) かいよう病

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の調査では、葉、果実ともに発病度はやや多である。

(イ) 気象予報では、気温は平年並か高い、降水量は平年並か少ないとされていることから、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 発病果や発病葉は早期に除去し、園地内の病原菌密度の低下を図る。

(イ) 強風により付傷すると発病が助長されるため、防風垣や防風ネットを整備する。

(ウ) 夏秋梢では、ミカンハモグリガの食害痕が病原細菌の侵入箇所となるので防除を徹底する。

(エ) ‘愛媛果試第28号’ ‘甘平’、‘はれひめ’等は、本病に罹病性なので発病に注意する。

(オ) 既に発生が認められる園地では、早めの薬剤散布に努める。

- (2) 黒点病
- ア 予報の内容 発生量：やや少
 - イ 予報の根拠
 - (ア) 7月中旬の調査では、やや少の発生である。
 - (イ) 気象予報では、気温は平年並か高い、降水量は平年並か少ないとされていることから、発生にやや抑制的である。
 - ウ 防除上の注意
 - (ア) 枯枝を早期に除去し、処分する。
 - (イ) マンゼブ剤およびマンネブ剤の散布間隔は、累積降水量が200～250mm(または散布後30日)に達した時である。ただし、本病に対して罹病性が高い品種の‘せとか’、‘河内晩柑’、‘清見’等の散布間隔は、累積降水量約180mm(または散布後25日)とする。

- (3) ミカンハダニ
- ア 予報の内容 発生量：やや少
 - イ 予報の根拠
 - (ア) 7月中旬の調査では、やや少の発生である。
 - (イ) 気象予報では、気温は平年並か高い、降水量は平年並か少ないとされていることから、現在の発生傾向が続くものと考えられる。
 - ウ 防除上の注意
 - (ア) 園地内の早期多発樹で、1葉当たりの雌成虫が平均2～3頭に達した時期が防除の目安となる。
 - (イ) 薬剤は掛けむらのないよう丁寧に散布する。

- (4) ミカンサビダニ
- ア 予報の内容 発生量：並
 - イ 予報の根拠
 - (ア) 7月中旬の調査では、発生は確認していない。
 - (イ) 気象予報では、気温は平年並か高い、降水量は平年並か少ないとされていることから、発生にやや助長的である。
 - ウ 防除上の注意
 - (ア) 被害果はその後の発生源となるため、早期に除去・処分する。
 - (イ) 被害は園地内で局地的に発生しはじめるため、発生状況に注意し発生後は早期防除に努める。

- (5) ヤノネカイガラムシ (第2世代)
- ア 予報の内容 発生時期：並～やや遅
 - イ 予報の根拠
 - (ア) 八幡浜市で7月14～22日に、松山市伊台で7月30日に第2世代幼虫の初発を確認した。平年より八幡浜市で3日程度遅く、松山市伊台で4日遅い発生である。
 - ウ 防除上の注意
 - (ア) 防除は、第2世代幼虫初発生から30日後を目安とする。

か き

- (1) 炭疽病
- ア 予報の内容 発生量：少～やや少
 - イ 予報の根拠
 - (ア) 7月中旬の調査では、やや少の発生である。
 - (イ) 気象予報では、気温は平年並か高い、降水量は平年並か少ないとされていることから、発生にやや抑制的である。
 - ウ 防除上の注意
 - (ア) 園地内をこまめに観察し、発病枝・発病果は早期に除去し、園外に持ち出す。
 - (イ) 定期防除に努める。

- (2) うどんこ病
- ア 予報の内容 発生量：やや少
 - イ 予報の根拠
 - (ア) 7月中旬の調査では、発病度の高い園地が認められるが、並の発生である。
 - (イ) 気象予報では、気温は平年並か高い、降水量は平年並か少ないとされていることから、発生にやや抑制的である。
 - ウ 防除上の注意
 - (ア) 通風、採光を図るとともに、園地内の排水を良くする。
 - (イ) 防除は、葉裏から丁寧に行う。

(3) フジコナカイガラムシ (第2世代)

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の調査では、発生は2園地のみであるが多である。

(イ) 気象予報では、気温は平年並か高い、降水量は平年並か少ないとされていることから、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 防除は、若齢幼虫の発生状況に応じて行い、発生が多い園ではその3週間後に第2回目を行う。

キウイフルーツ

(1) かいよう病

ア 予報の内容 発生注意

イ 予報の根拠

(ア) 関係機関による7月19日時点の集計では、キウイフルーツかいよう病の発生面積は、67.5 haとなっている(県内キウイフルーツ栽培面積：379.6ha, 平成29年産果樹統計資料及び果樹栽培状況等表式調査, 県農産園芸課)

(イ) 一部の発生園地では、現在も発病はみられるが、周囲への拡散はみられていない。

ウ 防除上の注意

(ア) 盛夏時に新たな病徴がみられなくなっても樹体内には病原菌は生存しているため、今後も園地見回りによる発生確認と被害部の除去を徹底する。なお、伐採基準は、平成31年3月改訂の「キウイフルーツかいよう病Psa3型の防除方針」に基づき発病程度に応じて適切に対応する。

(イ) 高温条件下では、果実のしぼみや枝枯症状が発生する場合がある。

(ウ) 台風の接近等、強風雨による病原菌の拡散防止や樹体の損傷を抑えるため園地の防風対策を行う。

果樹共通 (なし、かき、キウイフルーツ、かんきつ、もも)

(1) カメムシ類

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

(ア) 集合フェロモントラップ・予察灯における7月の誘殺数は、各地点ともに平年並～やや少で経過している(病虫害防除所ホームページ掲載データを参照)。

(イ) 県内11地点(7月中旬調査)のヒノキ球果の結実量はやや少ない(表1)。

(ウ) ヒノキ球果での寄生数(10回すくい取り調査)の結果は、チャバネアオカメムシの平均捕獲虫数は0.64頭/地点と平年(H22~H30年の平均値：1.03頭)に比べ少ない(表1)。

(エ) 林野からの離脱の目安となるヒノキ球果の口針鞘数は0.42個/球果であり、平年(H22~30の平年値：0.76個/球果)よりも少なく、新成虫がヒノキを離脱する25個/球果に達している地点はない(表1)。

(オ) 気象予報では、気温は平年並か高い、降水量は平年並か少ないとされていることから、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 8月以降は新成虫の発生時期となるため、園内への飛来に注意し発生初期の防除に努める。今年ヒノキ球果がやや少ない傾向であるため新成虫の果樹園地への飛来時期が早くなる場合がある。

(イ) 秋季の台風等の影響により風雨後に果樹園に飛来する可能性があるので注意する。

表1 果樹カメムシ ヒノキ球果調査(2019年7月調査)

調査地	結実量	10回すくい取り虫数						合計	口針鞘数/ ヒノキ1球果
		チャハネアオ		ツヤアオ		クサギ			
		成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫		
新居浜市船木	少	0	0	0	0	1	0	1	0.20
西条市丹原町田滝	やや多	0	0	0	0	0	0	0	0.05
今治市大西町脇	極少	0	0	0	0	0	0	0	0.45
松山市立岩	中	0	0	0	0	0	0	0	0.00
松山市菅沢	中	1	0	0	0	0	0	1	0.05
松山市久谷	多	4	0	0	0	0	0	4	3.50
久万高原町明神	やや多	0	0	0	0	0	0	0	0.00
内子町五十崎	やや少	0	0	0	0	0	0	0	0.00
西予市城川町土居	多	0	0	0	0	0	0	0	0.00
西予市宇和町西山田	やや多	0	0	0	0	0	0	0	0.00
宇和島市吉田町立間	やや少	2	0	0	0	0	0	2	0.35
愛南町城辺緑	極少	-	-	-	-	-	-	-	-
虫数平均(R01)		0.64	0	0	0	0.09	0	0.73	0.42
平年値(H22~H30)		0.97	0.04	0.1	0	0	0.12	1.19	0.76
今年の順位(H22~H30)		6	7	7	6	1	7	7	7

野菜

(1) 黄化えそ病(夏秋きゅうり)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の調査では、1圃場で多の発生である。

(イ) また、媒介虫のミナミキイロアザミウマの寄生虫数は並である。

(ウ) 気象予報では、気温は平年並か高い、降水量は平年並か少ないとされていることから、媒介虫のミナミキイロアザミウマの発生にはやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 発病株は、直ちに抜き取り適正に処分する。

(イ) 媒介虫の卵・蛹には薬剤の効果が悪いため、発生圃場では5～7日間隔で2～3回防除する。

(ウ) 媒介虫は、雑草等でも増殖するので圃場内外の除草を徹底する。

(エ) 露地・ハウス抑制栽培では定植時に、アザミウマ類に登録のある粒剤を施用するとともに、シルバーポリマルチ等の物理的防除を行う。

(2) 褐斑病(夏秋きゅうり)

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の調査では、並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は平年並か高い、降水量は平年並か少ないとされていることから、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 草勢低下、窒素肥料の過多は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。

(イ) 老化葉や発病葉は早めに除去する。

(ウ) 発病初期の防除に重点を置き、葉裏まで丁寧に散布する。

(3) 炭疽病(夏秋きゅうり)

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の調査では、並発生である。

(イ) 気象予報では、気温は平年並か高い、降水量は平年並か少ないとされていることから、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 草勢低下、窒素肥料の過多は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。

(イ) 老化葉や発病葉は早めに除去する。

(ウ) 発病初期の防除に重点を置き、葉裏まで丁寧に散布する。

(4) 葉かび病(夏秋トマト)

ア 予報の内容 発生量：少

- イ 予報の根拠
 - (ア) 7月中旬の調査では、発生を確認していない。
 - (イ) 近年は本病抵抗性遺伝子 *cf-9* を持つ品種の作付けが多い。
 - (ウ) 気象予報では、気温は平年並か高い、降水量は平年並か少ないとされていることから、発生にやや抑制的である。
 - ウ 防除上の注意
 - (ア) 草勢が衰えると発病しやすくなるので、肥切れしないように適正な肥培管理に努める。
 - (イ) 定期的な薬剤防除を行い、薬液が葉裏までかかるよう丁寧に散布する。
- (5) 炭疽病 (いちご育苗床)
- ア 予報の内容 発生量：やや少～少
 - イ 予報の根拠
 - (ア) 7月中旬の調査では、やや少である。
 - (イ) 気象予報では、気温は平年並か高い、降水量は平年並か少ないとされていることから、発生にやや抑制的である。
 - ウ 防除上の注意
 - (ア) ランナー、葉柄、小葉に病斑が見られる株は、伝染源となるので直ちに除去する。特に小葉は本病に対する感受性が高く発病しやすいので、この部位を中心に発病把握に努める。
 - (イ) 降雨によって胞子が飛散するので、降雨前後の防除を徹底する。
 - (ウ) 底面・株元給水は雨よけ栽培との併用で本病の防除効果が高い。なお、頭上灌水を行っている圃場では夕方遅い時期の散水は避ける。
 - (エ) 定期的な薬剤防除を行う。
- (6) アブラムシ類 (さといも、夏秋野菜全般)
- ア 予報の内容 発生量：並～やや多
 - イ 予報の根拠
 - (ア) 7月中旬の調査では、夏秋トマトで多、夏秋きゅうり・夏秋なすで並、さといもでやや少である。
 - (イ) 黄色粘着トラップによる有翅アブラムシの誘殺数は少で推移している (病害虫防除所ホームページ掲載データを参照)。
 - (ウ) 気象予報では、気温は平年並か高い、降水量は平年並か少ないとされていることから、発生にやや助長的である。
 - ウ 防除上の注意
 - (ア) 圃場観察を行い早期発見に努め、発生が見られたら早めに防除する。
- (7) ハダニ類 (いちご育苗床、さといも、夏秋野菜全般)
- ア 予報の内容 発生量：並～やや多
 - イ 予報の根拠
 - (ア) 7月中旬の調査では、夏秋きゅうりで多、夏秋なすでやや多、さといも・イチゴ育苗床では少である。
 - (イ) 気象予報では、気温は平年並か高い、降水量は平年並か少ないとされていることから、発生にやや助長的である。
 - ウ 防除上の注意
 - (ア) 圃場観察を行い早期発見に努め、発生が見られたら早めに防除する。
 - (イ) 薬剤感受性の低下を防止するため、同一系統の薬剤の連用は避け、ローテーション使用とする。
 - (ウ) 多発圃場では、散布間隔を詰めて密度抑制に努める。
 - (エ) 圃場周辺の除草に努める。
- (8) コナジラミ類 (いちご育苗床、夏秋野菜全般)
- ア 予報の内容 発生量：やや多～多
 - イ 予報の根拠
 - (ア) 7月中旬の調査では、夏秋なすでタバココナジラミが一部圃場で多、夏秋トマトではオンシツコナジラミが一部圃場で多である。
 - (イ) タバココナジラミが媒介するウイルス病 (トマト黄化葉巻病) の発生は確認していない。
 - (ウ) 気象予報では、気温は平年並か高い、降水量は平年並か少ないとされていることから、コナジラミ類の発生にやや助長的である。
 - ウ 防除上の注意
 - (ア) 薬液が葉裏までかかるように定期的な薬剤散布を行う。
 - (イ) 本虫は、多くの植物に寄生するため圃場内外の除草を徹底する。

- (9) ハスモンヨトウ (大豆、さといも、夏秋野菜全般)
- ア 予報の内容 発生量：やや多～多
 - イ 予報の根拠
 - (ア) フェロモントラップによる誘殺数は、7地点のうち1地点で平年より多い(病害虫防除所ホームページ掲載データを参照)。
 - (イ) 7月中旬の調査では、サトイモでの被害程度は多である。
 - (ウ) 気象予報では、気温は平年並か高い、降水量は平年並か少ないとされていることから、発生にはやや助長的である。
 - ウ 防除上の注意
 - (ア) 圃場観察を行い幼虫の早期発見(大豆では白変葉の発生)に努め、若齢期に防除する。
- (10) オオタバコガ (夏秋野菜全般)
- ア 予報の内容 発生量：やや多
 - イ 予報の根拠
 - (ア) フェロモントラップによる誘殺数は、5地点のうち2地点で平年より多い。(病害虫防除所ホームページ掲載データを参照)。
 - (イ) 気象予報では、気温は平年並か高い、降水量は平年並か少ないとされていることから、発生にはやや助長的である。
 - ウ 防除上の注意
 - (ア) 圃場観察を行い幼虫の早期発見に努め、若齢期に防除する。
- (11) シロイチモジヨトウ (ねぎ、夏秋野菜全般)
- ア 予報の内容 発生量：並～やや多
 - イ 予報の根拠
 - (ア) フェロモントラップによる誘殺数は、平年並で推移している地点が多い(病害虫防除所ホームページ掲載データを参照)。
 - (イ) 気象予報では、気温は平年並か高い、降水量は平年並か少ないとされていることから、発生にはやや助長的である。
 - ウ 防除上の注意
 - (ア) 圃場観察を行い幼虫の早期発見に努め、若齢期に防除する。

【病害虫発生予察情報】

愛媛県病害虫防除所ホームページでご覧になれます。

ホーム > 仕事・産業・観光 > 農業 > 鳥獣害・病害虫対策 > 愛媛県病害虫防除所

ホームページアドレスは<http://www.pref.ehime.jp/h35118/2406/byocyubojo/index.html>

【農薬使用時の注意】

- ◎農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定しましょう。
- ◎農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては、適用作物、使用回数、使用時期、使用濃度、使用量、使用方法等の使用基準を遵守しましょう。
- ◎病害虫等の発生を的確に把握し、適時適切な経済防除に努め、農薬や労力等の低投入を図るとともに、低毒性農薬を使用しましょう。
- ◎農薬による防除のみに頼らず、耕種的防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除を推進しましょう。
- ◎同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫の出現や助長をまねくので、農薬のローテーション使用を心掛けましょう。
- ◎農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容、使用上の注意事項等を遵守し、農薬の散布にあたっては、農薬の種類に応じた保護具を必ず装着しましょう。
- ◎農薬の保管管理や取り扱いに注意し、紛失、盗難等の未然防止を図りましょう。